

子ども会および育成会活動の課題とその活動支援

山本和人¹ 大野清恵²

Analysis of the Problems of Children's Association and Suggestions about the Supports for Parents' Association

YAMAMOTO Kazuhito ONO Kiyoe

【要旨】

子ども会の現状は加入率が下がる等さまざまな問題を抱えている。埼玉県入間市の子ども会と育成会を事例に、子ども会活動及びその育成会の活動を活発にするためにはどのような支援が必要かを考える基礎資料とするため、子ども会と育成者を対象に調査を実施した。

その結果、子ども自身の子ども会活動への関わり方の問題点が指摘できると同時に、活動のあり方の再考が必要であり、育成者である親は子ども会の意義を理解しながらも、「親が役員をやらなくてはならないこと」「夜出かけなければならないこと」を負担に考えていることがわかった。これらの問題を解決するためには、子ども自らの会の運営や父親の子ども会への協力、組織的には自治組織や行政区によらない新たな組織作り等が重要であることを提言する。

【キーワード】

子ども会、子ども会育成会、子ども会活動支援

I 調査について

1 調査の目的

子ども会の現状を全国規模で見るとき、少子高齢化の進展により、団体数の減少、加入率の減少など、多くの課題を抱えている。しかし、子どもにとって、身近な地域社会における仲間集団の形成と活動の展開は、社会生活の基本を学ぶということでもあり、現代社会のように人間関係が弱くなっている状況では、非常に貴重な体験を与えるものといえる。

そのような子ども会活動および育成会活動を活発にするためには、どのような支援が必要かを考える基礎資料とすることを目的に、調査を実施した。

2 調査の概要

調査は埼玉県入間市の、①単位子ども会における子どもを対象としたもの、また、②親や役員を対象としたものの、計2種類の質問紙調査を実施した。対象者は678組の親子（各単位子ども会の役員とその子ども・各単

1 東京家政大学文学部 (Faculty of Humanities in Tokyo-kasei University)

2 東京家政大学地域連携協力推進センター (Community Center of Tokyo-kasei University)

位子ども会に加入している小学3年生以上の子どもとその親)で、平成17年10月14日(金)～10月30日(日)に実施した。調査の方法は親子別々の質問紙による調査である。調査用紙は子ども会役員を通じて配布し、回収は親子同一の封筒に入れて、郵送によった。回収状況は大人458票(男19, 女439), 子ども453票(男193, 女260)であった。また、有効回収数は、子ども451, 大人458であった。

3 対象となった子ども会の地域状況

調査を実施した入間市は首都圏40kmの埼玉県西部に位置している。昭和41年市制施行時の人口は46,234人であったが、調査時人口は150,266人(平成17年10月1日現在)であり、首都圏の住宅地として発展してきている。子ども会の現況については、加入状況は表1「入間市の子ども会会員数」のとおりである。子ども会を脱会したり、加入しない子どもがふえており、小子化とあいまって減少傾向にある。組織は自治会単位に単位子ども会を形成している。単位子ども会が自治会組織ごとにまとまって「地区子ども会育成会連絡協議会」を組織し、その上部組織が「市子ども会育成会連絡協議会」となっている。行政の担当部署は教育委員会生涯学習課青少年活動センターである。

本報告では、子どもを対象とした調査結果からは子どもの現状から見た子ども会活動の課題について検討し、次に、親と役員を対象とした調査結果から子ども会・育成会の活動

支援のための現状と課題を検討し、最後に、子ども会および子ども会育成会の今後課題と必要な支援のあり方を述べることにする。

II 子どもの現状から見た子ども会活動の課題

今回の調査は子ども会に加入している子どもたちを対象としたものであり、必ずしも子どもの全体的な状況とはいえないものではある。子ども会に加入している子どもの現状をとらえることは可能である。そこで最初に、子どもたちがどのような日常生活をしているか、その一端として子どもたちの遊び場所・居場所を検討する。次に、加入している子どもたちは、子ども会の活動をどのように見ているかを検討する。最後に、それらの結果から、子ども会活動の今後のあり方や課題を考えることとする。

1 子どもたちの日常と居場所

限られた質問項目ではあるが、「忙しい」とされる子どもたちの遊び場所や居場所がどこなのかを検討する。

(1) 放課後の居場所と活動

まず、子ども会に加入している子どもたちの、放課後の子どもの居場所を見たのが表2である。

表2からすると、放課後の居場所として最も多いのは「家にいる」で、次が、「塾やお稽古をする場所にいる」となっている。その他、「友達の家にいる」「近所にいる」「公園にいる」「学校にいる」などが続く。「家にいる」「友達の家にいる」を合わせると2人に

表1 入間市の子ども会会員数の変化

	幼児	小学生	中学生	J. R.	小計	指導者・育成者	計	団体数
15年度	410	3887	79	48	4424	1493	5917	91
16年度	429	3629	56	11	4125	1302	5427	80
17年度	382	3405	58	11	3856	1283	5139	80

1人以上は、家の中にいることになる。

また、「何をしていることが多いか」という質問では、次の表3のようにになっている。

まず、「家の手伝いをする」という子どもは少ない。「買い物に行く」というのも、自分のものを買うか家のもの(食事の用意など)を買うかで異なるが、そのような子どもも見られない。最も多い回答は、「友達と遊ぶ」であり、表2に見た放課後過ごす場所との関連を見ると、家にいて友だちと遊んだり、宿題をしたり、テレビなどを見たり、本・マンガを見るなどしている。外にすることが少ないのが分かる。

(2) 遊べる場所の有無

「近所に公園や広場など安心して遊べるところがあるかどうか」の質問では、70.0%が「ある」と答えている。「ない」というのは17.7%であり、安心して遊べる場所があるにもかかわらず、先の表3からすれば、公園や広場というような場所では遊んでいない。

(3) 遊び相手の人数

では、子どもたちはどのくらいの人数で遊んでいるのであろうか。次の表4がそれを示している。「1人」で遊ぶという子どもは少ないが、いないわけではない。子ども会に関わっているということもあるかもしれない。最も多いのは「3人」で30.5%である。「2～3人」「3～4人」を加えても40%に満たない。「4人」をこえる人数で遊んでいる子どもたちは、合計で22.1%であり、5人に1人は仲間集団といえるような中ですごしている。しかし、子どもの半数以上は3人以下である。少人数で遊んでいるといえる。

(4) 休日の活動と一緒に過ごす人

では、休日には、誰と何をしているかを見ると、それぞれ次の表5、表6のようであった。一緒に過ごす人で最も多いのは、「家族や親戚」であり、6割をこえている。続いて、「学校の友だち」がおよそ2割である。「子ども会の友だち」や「学校以外の友だち」は非常に少ない。

表2 放課後の居場所

放課後の居場所	比率	放課後の居場所	比率	放課後の居場所	比率
家にいる	40.2	近所にいる	9.9	学校にいる	6.4
友達の家にいる	10.6	塾やお稽古する場所にいる	13.2	お店や商店街などにいる	0.4
地区の公民館や図書館にいる	1.3	学童保育の場所にいる	2.6	公園にいる	7.7
その他	1.8	不明	5.7	合計	100.0

N=451

表3 放課後の活動

放課後していること	比率	宿題をする	13.5	友達と遊ぶ	36.2
習い事や塾へ行く	12.6	家の手伝いをする	—	テレビゲームをする	5.5
テレビなどを見ている	5.7	スポーツをする	7.9	ぶらぶらしている	1.3
本・マンガを読む	4.9	買い物に行く	—	一人で遊ぶ	3.8
その他	3.1	不明	5.5	合計	100.0

N=451

また、休日にしていることで多いのは、次の表6とおりでである。1人当たり2つの活動を選んでいくことになるが、最も多いのは、「テレビを見る」であり、学校のある日とは異なる。また、同じくらい比率で「友達と遊ぶ」をあげている。子ども会活動をあげているのはわずかである。活動回数の問題もあると思われるが、子どもたちにとって、子ども会活動はある意味「非日常」ということではないだろうか。

(5) 学習塾・習い事の活動

上で見たように、放課後の活動として

12.6%の子どもが、また、休日の活動として15.0%の子どもが「塾・習い事」に行っている。実際どの程度の子どもたちが学習塾や習い事に行っているかについて、直接たずねた結果では次の表7のようになった。

「学習塾」「お稽古事」の両方に行っている子どもはおよそ5人に1人である。学習塾だけに行っている子どもは約1割、お稽古事だけに行っているという子どもは半数をこえる。子どもたちの2人に1人は何らかの習い事をしている。

表4 一緒に遊ぶ友だちの人数

人数	1人	2人	2~3人	3人	3~4人	4人	4~5人	5人	5~6人
比率	1.1	18.3	5.1	30.5	3.1	18.8	1.1	11.7	0.4
人数	6人	6~7人	7人	8人	9~10人	10人	13人	不明	合計
比率	2.6	0.4	2.0	1.8	0.2	1.5	0.4	1.1	100.0

N=451

表5 休日に一緒に過ごす人

一緒にいる人	比率	ひとり	4.0	家族や親戚	63.1
学校の友だち	21.6	学校以外の友だち	3.5	子ども会の友だち	0.2
その他	5.1	不明	2.4	合計	100.0

N=451

表6 休日の活動

休日の活動	比率	宿題や勉強	28.0	スポーツ	26.3
テレビを見る	36.2	テレビゲーム	18.8	友達と遊ぶ	35.3
習い事や塾に行く	15.0	家の手伝い	10.8	子ども会活動	3.1
その他	17.9	不明	0.4	合計（複数回答）	191.8

複数回答 N=451

表7 塾・お稽古事へ行っている子どもの比率

選択肢	比率	学習塾に行っている	11.3
お稽古事に行っている	51.7	学習塾とお稽古事の両方に行っている	20.3
どちらにも行っていない	14.6	わからない	1.3
不明	0.9	合計	100.0

N=451

2 子ども会活動への関わり方と活動に対する評価

次に、子どもたちが、子ども会の活動をどのように思っているのかを見ることにする。

(1) 子ども会行事の感想と楽しいと思うこと (子ども会の交流)

子どもたちが子ども会活動に参加して楽しいと思うことは何かを示すのが表8である。子ども会はそれぞれの地域で特色ある活動を行っているが、この地域では、市内の子ども会育成会が中心となって開催する「子どもまつり」や「かるた大会」などが、特色ある行事といえる。

最も楽しいと思っているのは、「クリスマス会」、続いて、「子どもまつり」「かるた大会」などとなっている。その一方で、「楽しいことはない」と回答する子どもが20人に1人くらいの割合でいることになる。

では、やってみたい活動はどのようなものかを見ると、表9のようになった。平均すると1人当たり5つの活動を選択していることになる。ここに示した活動は、子どもたちがやってみたいのではないと思われるさまざま活動を掲げたものである。

上位に挙げられるのは、「クリスマスパーティーなどのお楽しみ会をする」「遊園地で遊ぶ」「映画を見る」であり、50%をこえて

表8 楽しい子ども会活動

楽しい活動	比率	おじいさんおばあさんと遊ぶこと	5.7
遠足	15.9	違う学年のこと遊ぶこと	19.6
キャンプ	15.2	行事を決める時の話し合い	6.8
草取りなどの奉仕活動	4.4	子どもまつり	45.0
廃品回収	15.9	楽しいことはない	5.7
クリスマス会	53.0	その他	17.7
かるた大会	33.8	不明	—
夏休みのラジオ体操	13.0	合計（複数回答）	251.7

複数回答 N=451

表9 してみたい活動

してみたい活動	比率	動物園や水族館へ行く	43.0
山や海、川など自然の中で遊ぶ	47.2	クリスマスパーティーなどのお楽しみ会をする	55.4
スポーツや音楽、美術・工作などを学ぶクラブ活動をする	23.8	花見、七夕まつり、花火大会、もちつき、など季節の行事をする	43.9
工作・絵の発表会に参加する	7.1	遊園地で遊ぶ	55.2
音楽・劇の発表会に参加する	7.9	部屋の中でゲームをする	16.8
スポーツ大会に参加する	27.8	映画を見る	54.1
公園やアスレチックで遊ぶ	36.0	ボランティア活動をする	11.0
大きな広場で大勢で遊ぶ	27.2	その他	3.1
キャンプをする	40.6	不明	0.7
博物館や美術館へ行く	13.5	合計（複数回答）	514.3

複数回答 N=451

いる。また、続いて、「山や海、川など自然の中で遊ぶ」「花見、七夕まつり、花火大会、もちつき、など季節の行事をする」「動物園や水族館へ行く」「キャンプをする」は40%をこえていて、多くの子どもたちに希望されている活動といえる。50%をこえる上位の活動は、学習の要素よりも楽しむ要素が強うかがえる。また、やや低いものの希望者が40%をこえる活動は、従来から子どもらしい活動に、あるいは子どもにとって望ましい活動とされるものが挙げられているといえよう。

またさらに、「よその子ども会と一緒に何かの活動・行事をしてみたいと思うか」という質問に対しては、「思う」が40.6%、「思わない」が34.2%であり、他の子ども会との交流をしたいと考える子どもの方がやや多くなっている。

(2) 参加してよかったこと

子ども自身が、子ども会に参加してよかったこととはどのようなことであろうか。表10は、子ども自身のもつ子ども会のとらえ方や、評価が現れている。

表からすると、「楽しい行事」があることをあげる子どもが4人の中で3人の割合である。次が、「いろいろなところに行くことができたとき」「違う学年の友だちができたとき」であり、およそ3人に1人はそれらを挙げている。

先にも述べたことであるが、楽しい行事やいろいろなところに行くこと、さらには、違う学年の友だちができることは、子どもたちにとっては、やはり「非日常的」な活動である。普段の生活の延長線上にあるというよりは、構えて臨む活動といえるかも知れない。

こうした状況の中で、子ども会の活動が親

表10 子ども会に参加してよかったこと

参加してよかったこと	比率	楽しい行事があったとき	74.8
自分の役目を最後までやりとげたとき	16.1	いろいろなところに行くことができたとき	38.0
誰かにほめられたとき	14.8	住んでいる地域のことがわかったとき	7.9
同じ学年の友だちができたとき	23.2	その他	6.2
違う学年の友だちができたとき	33.3	不明	2.0
大人の人と親しくなれたとき	11.0	合計（複数回答）	227.3

複数回答 N=451

表11 子ども会活動を子どもたちで決めているか（実態）と決めたいか（希望）の関連

	思う	思わない	どちらでもない・わからない	横計
決めている	69.5 (57)	7.3 (6)	23.2 (19)	100.0 (82)
決めていない	32.6 (62)	31.6 (60)	35.8 (68)	100.0 (190)
わからない	25.4 (43)	19.5 (33)	54.4 (92)	100.0 (168)
計	36.4 (162)	22.1 (99)	40.0 (179)	100.0 (440)

上の表は欠損値を除いた。 χ^2 乗値は61.915で有意差があった（危険率1%未満）。数字は比率（実数）である。

に伝えられているものかどうか。子どもは活動が楽しければ、親に話したがるものではないだろうか。そこで、「子ども会でしたことを、家の両親に話すかどうか」をたずねたところ、「よく話す」35.8%、「時々話す」39.5%、「あまり話さない」13.9%、「ほとんど話さない」9.7%と、家では話さない子どもが20%をこえている。

(3) 子ども会活動の決めかたについて

子どもたちの希望する活動ができるかどうかは、必ずしも子どもたちだけの相談で決められるものではない。子どもの望む活動は経費がかかるものが多い。そこで、子ども会の活動がどのように決められるかを簡単に見た結果が次のとおりである。

子どもたち自身で活動や行事を「決めている」という回答は18.3%である。42.2%は自分たちでは決めていないと回答している。上の表は欠損値を除いた。 χ^2 乗値は61.915で有意差があった(危険率1%未満)。

現在子どもたちで決めているかどうかによって、決めたいかどうか希望に違いがあるかを見たところ、実際に自分たちで活動を決めている子どもたちは、「自分たちで決めたい」と回答している子どもが多いことが分かる。

(4) 役員経験や役員希望

子どもたちが子ども会の役員(会長やリーダー)になったことがあるかどうかを尋ねる質問では、「ある」というのは14.3%であり、多くの子ども自身は役員経験が無い(84.3%)。「してみたいかどうか」の質問では、「してみたい」10.2%、「どちらかといえばしてみたい」7.9%、反対に、「したくない」23.8%、「どちらかといえばしたくない」11.0%であり、したくないほうが大きな値となっている。

3 子どもから見た子ども会と今後の課題

以上、子どもから見た子ども会活動のあり方を、子どもの日常における活動や居場所と

の関連で、また、子どもが子ども会活動をどのように評価しているかという側面から検討してきた。

その結果から指摘できる現状と課題をまとめると次のことが指摘できよう。

①子どもたちは、遊べる空間があっても家の中で遊ぶ場合が多く、やりたいことは商業施設との関わる事柄を挙げる。また、日常的に遊ぶ友だちの数は少なく、休日は家族と一緒にいる。また、半数以上が習い事をしており、学習塾と両方に通っている子どもも少なくない。

②子どもにとって子ども会活動は、楽しい行事があるものの、必ずしも望ましいものにはなっていないと考えられる。それは、家で子ども会の活動について話さない子や、役員になりたくないという子が多いことから分かる。また、子どもたち自身で計画を立てているわけでもない。また、子ども会に参加することは、非日常的な出来事であり、楽しいかもしれないが、構えが必要な場なのではないだろうか。

③とは言うものの、子どもにとって人間関係をつくれる場でもあると考えられる。違う学年の友だちができることや、よその子ども会との交流に期待している点、高齢者とのふれあいなど、期待を持っている。

このような子どもたちの現状からするならば、今後の活動のあり方に、いくつか課題が提起できよう。

①子どもは、子どもたちとの交流を望んでいる。また、してみたい活動は家族だけでも出来ないものではないが、いわば非日常的な活動であり、出かけていたり、いろいろな活動を望んでいる。こうしたことからすれば、「子どもまつり」等の交流やふれあいを大切にする行事や、単独の子ども会では行けない場所に、他の子ども会と合同で一緒に行ける

ような機会を持つことが考えられる。

②子ども会の活動が半ば行事化されている様子がわかる。また、日常的に子ども会のかかわりがあるわけでもない。つまり、どこかに出かけたり、クリスマス会などの催事を行う活動が多いのである。こうしたことは楽しくも自分たちで決められないことへの不満もありそうである。本来は、子ども自身の活動として子ども会が存在することを改めて考慮すべきではなかろうか。

③そして、子どもの参加者が少なくなり、維持できない子ども会が出て来るということであれば、少し大きな地域単位で子ども会を組織していくことも必要ではなかろうか。

Ⅲ 子ども会育成会の活動とその支援

1 親の子ども会経験からみる子ども会の意義

調査に回答した育成者（親）は、現在役員

が206人45.0%、役員経験者が188人41.0%、役員経験なし64人14.0%の計458人であった。役員経験者が多く、子ども会活動にも積極的な姿勢が予想された。このことは過去の経験も影響していると思われる。具体的には幼少時の楽しかった子ども会の経験である。表12「親自身の子ども会への参加状況」のとおりで、「よく参加・時々参加」し、「とても楽しかった・楽しかった」と答えた親は346人中277人で80.1%を占めている。

さらに、「現在役員をして良かった」と感じている人は206人中179人である。子ども会活動に対する親の積極性がうかがえる。その理由は（複数回答）表13「役員をしてよかったこと」のとおりである。1位が「近所の子どもの名前がわかる」2位は「地域の人と知り合いになった」3位「子どもの親の顔がわかった」となっている。このことから、親は子ども会活動を通して、「子ども」に関して

表12 親自身の幼少時子ども会への参加状況

参加状況	とても楽しかった	楽しかった	どちらともいえない	あまり楽しくなかった	楽しくなかった	合計 % (実数)
よく参加	29.5	61.8	7.1	1.2	0.4	100.0(241)
時々参加	5.2	53.1	32.3	9.4	-	100.0(96)
あまり参加せず	-	12.5	25.0	25.0	37.5	100.0(8)

上の表は欠損値を除いた。 χ^2 二乗値は168.190で有意差があった（危険率1%未満）。

表13 役員をしてよかったこと（複数回答）

よかったこと	%		
		子どもが活動楽しむ	19.6
近所の子どもの名前がわかる	78.2	子どもとの会話増	17.8
地域の人と知り合いになった	77.7	兄弟姉妹で楽しむ	16.2
子どもの親の顔がわかった	60.3	父親も参加	11.7
子どもの様子がわかる	48.6	子育ての相談できる	10.6
自分に友達ができた	45.3	社会の一員である実感	9.5
よその子どものことまで考える	28.5	子育てに自信	1.7
近所付き合いしやすくなった	22.9	子育ての考え変わる	1.1
役に立っているという充実感	19.6	その他	3.4

N=179（役員経験者数）

ではなく、親自身にも大きな意味を持っている。「育成会」は「子ども会」を育てるといふ組織だけではないといえるであろう。

地域とのつながりを考える上で、子どもを通しての育成会の経験はたいへん重要な経験である。住民自治を考える上で「となりの人がわかる」という経験は、その後の自治活動の入り口であり、出発点である。また、近頃問題となっている「子どもの安全をどう守るか」といった問題への取り組みも、基本的に、「近所の子ども名前がわかる」「子どもの親の顔がわかる」といったことから始まる。

2 子ども会に加入すべきか、また、勧める理由・勧めない理由

子どもを子ども会に加入させている理由は表14（複数回答）のとおりである。1位は「いろいろな体験」で2位「異年齢の子と接する」3位「たくさんの友達」とあるように子ども会の目的ともいえる回答が多かった。子ども会に対する親の期待がうかがえるが、4位には「皆入っているから」という回答もあり、自治会単位での子ども会の長所でもあると同時に、入りたくない人もとりあえず入っている、ということもあるのではないだろうか。

次に「子ども会に加入すべきかどうか」の間には表15「加入に関する考え方」のとおりであった。回答者に役員経験者が多く、また

P T Aの役員経験者299人（65.3%）自治会役員経験者250人（54.6%）も合わせて考えると子ども会活動への参加を積極的に考えていることが予想される。「加入すべき」と考える人は72人で15.7%、「どちらかといえば加入」が184人で40.2%合わせると55.9%となる。しかし、「どちらともいえない」と答えた人が165人で36.0%を占めており、さらにこれらの人の細かい分析を試みた。

子ども会への加入を勧める理由は表16のとおりである。1位が「近所に知り合い」で223人、2位は「地域がわかる」209人、3位が「友達増」で178人となっている。「加入すべき」「どちらかという加入すべき」と考える人の加入を勧める理由（複数回答）は「近所の人と知り合いになった」148人、「地域のことが良くわかった」141人「子どものためになった」129人となっている。

子ども会への加入を勧めない理由を示す表17（複数回答）は、1位が「親が役員をやらなくてはならない」で165人、2位「夜出かける」95人、3位「仕事を休む75人」であった。「どちらともいえない」と答えた人たちの「勧めない理由」1位は「役員をやらなくてはならない」84人、2位は「夜の外出」50人、「仕事を休む」37人となっている。「加入しなくてよい」「どちらかといえば加入しなくてよい」と考える33人の「勧めない理由」（複数回答）は「役員をやらなくてはならない」

表14 子ども会に加入させている理由（複数回答）

理由	回答数	%	子どもが入りたい		
いろいろな体験	195	42.6	自然と触合う機会	76	16.6
異年齢の子接する	189	41.3	通学班と同じ	42	9.2
沢山の友達	166	36.2	近所に子ども少ない	35	7.6
みんな入っている	147	32.1	文句を言われる	24	5.2
皆入るものである	132	28.8	兄弟が少ない	22	4.8
成長に影響	102	22.2	その他	19	4.1
				25	5.5

N=458 NA=10

24人, 「仕事を休む」13人となっている。

これらのことから, 子ども会の有益性については認めながらも, 「親が役員をやらなくてはならない」「夜出かける」「仕事を休む」これらのことが, 負担になっていることがわ

かる。この負担を軽減する方策を考えることが必要である。

この「役員決め」については現状ではどの様に決めているのか尋ねたところ1位「話し合い」86人, 「ルールがある」54人, 「くじやじ

表15 加入に関する考え方

加入の有無の意見	%
加入すべき	15.7
どちらかといえば加入	40.2
どちらともいえない	36.0
どちらかといえば加入せず	2.8
加入せず	4.4
NA	0.9
計	100.0

N=458

表16 勧める理由 (複数回答)

理由	%
近所の人と知り合いになった	48.7
地域がよく分かった	45.6
子どもに友だちが増える	38.9
子どものためになった	35.6
親が子育ての相談が出来る	7.9
組織に入っていると責任問題や保健などで安心だ	2.2
その他	7.2

N=458 NA=42

表17 勧めない理由 (複数回答)

理由	%
親が役員をやらなくてはならない	36.0
夜、出かけることが多い	20.7
親が仕事を休まなければならない	16.4
休日に仕事があるのは嫌だ	10.5
子どもも含め、近所付き合いがたいへんになる	3.9
親として人付き合いがめんどうだ	2.6
その他	8.7

N=458 NA=201

ゃんけん」42人となっている。

これらに関して、さらに調査用紙の自由記載欄に多くの回答を得た。57件の記入があったが、うち、子ども会活動に肯定的意見が32件、否定的意見が7件、その他18件であった。肯定派、否定派の意見の内容を見ると「役員の負担に関すること」「親の負担に関すること」が20件、「役員をやってよかった」とするものが2件あった。さらに子ども会活動を通して「人とのつながりやコミュニケーションの重要性」をあげるものが5件、子ども会活動否定派の「子ども会はなくても困らない、子ども会がなくても地域のつながりが他にないわけでもない」という意見も1件あった。肯定派では「子ども会を通して人間的に成長してほしい」とする意見が6件、「地域で子どもを育てる」とする意見が4件あった。

これらのことから、子ども会の活動に肯定的な意見が多い中、活動の活性化には「親の負担」をどうするかという問題が重要であると考えられる。

IV 子ども会・育成会活動に必要な支援

1 子ども会の内部から

親の負担を軽減させる一番の方法は、子どもの自主性にまかせた子ども会運営が考えられる。全て親がお膳立てではなく、子どもによる子ども会の運営である。忙しい子どもは時間がなくできない。(自由記載欄8件)という意見もあるが、調査でも「子ども会の活動、行事を自分たちで決めていますか」という問に「自分たちで決めている」と答えたものは18.3%であり、「自分たちで決めたい」と答えているものは36.4%であった。また、平日の放課後の過ごし方では「塾や習い事へ行っている子」は12.6%であり、「休日の過ごし方」では「塾習い事」は15.0%であった。休日の「スポーツ」26.5%はサッカークラブや少年野球も考えられるが、あきらかに全て

の子が忙しいわけではない。

さらに、子ども会への注文では「もっと行事を増やしてほしい」考える子が34.4%いるように、親が負担を大変と感じることとはうらはらに、子どもの子ども会への期待もうかがえる。

2 子ども会の外部からの支援

子どもに対する文部科学省等の「子どもの居場所づくり」「地域子ども教室」の政策がはじまったが、それが「子ども会」と同様の機能を持つかということ、それは望めない。子ども会に加入している親の考える理由は表6にあるように「いろいろな体験」16.6%「異年齢の子と接する」16.1%「たくさんの友達」14.1%という目的は達成できても、役員をされていてよかった理由の「近所の子どもの名前がわかった」16.7%や「地域の人と知り合いになった」16.3%「子どもの親の顔がわかった」12.8%を充たすことはできない。また、加入を勧める理由の「近所の人と知り合いになった」26.2%、「地域のことがわかった」24.5%のように親子ともども成長を期待することもできない。対象と目的が違うとはいえ、それでは同じ機能を持つ「活動」があるかということ、大変難しい。そのため「子ども会」「育成会」をさらに支援する政策が重要であると考えられる。

具体的には「地域」の支援である。どのような方法があるか。自治組織からの支援が重要であると考えられる。単位子ども会が自治会と関係、つまり行政区による区割りと重なる部分も多く、子ども会の親の考える「役員をして良かったこと」や「加入を勧める理由」から自治会とは共通の基盤に立っており、この関係を強化することが重要と考える。それは活動費の補助から、さらに子育ての終わった人たちの子ども会への協力が考えられる。地域の老人クラブの協力も考えられるだろう。特に子ども会は「子ども地域で育てる場」と

考えれば何らかの協力は得られるのではないだろうか。

ところで、現実には、少子化によって人数の減った「子ども会」を隣の自治会の子ども会と「自治組織」の枠をこえての合併するのは難しい。入間市内のA地区子ども会育成会連絡協議会内では、平成12年20団体の単位子ども会があった。なかに少子化の影響により1団体で2人の子ども会員組織となる単位子ども会は隣接する自治組織の子ども会との合併を諮ったが、合併できず解散となった。この後同じような状況により自治組織を越えての合併は難しく、平成17年にはA地区内単位子ども会数は12団体と減少傾向にある。

そこで組織構成を行政区割りの自治組織から「学校区」を単位子ども会としてとらえ組織の人員の減少をくい止め、さらに学校の教職員やPTAの組織の協力を得るという方法も考えられる。いずれもより多くの人の協力支援を得ようとした場合、行政の協力体制も不可欠である。

今回調査で明らかになった具体的問題点である「役員をやらなくてはならない」「夜出かけなくてはならない」については、回答者458名のうち男性が19人という回答からもわかるように、「子ども会・育成会」を担っているのはほとんどが「お母さん」である。アンケートの自由記載欄にもあったように「会長といった責任あるポジションは父親といった傾向があります。これはよい面もありますが、もっと父も参加できる、子育てに時間を費やせる、社会体制・社会認識の変化が望まれます。」父親の参加が重要になってくる。まずもって現在のところ母親が「夜の会議」に参加しなければならない不満は「父親の留守番」だけでもずいぶん解消されるのではないだろうか。また子ども会行事への父親の協力が得られれば「役員の負担」も当然軽減される。まさに「社会体制・社会認識」の変化も重要である。

3 今後の課題

今回調査では育成者は「子ども会」の利点を親は自分なりに理解しているにもかかわらず、「役員になること」「夜出かけなければならぬこと」が問題点として挙げられた。そのためこれらの問題を解決するため具体的な方策について検討する必要がある。例えば、「組織」としての子ども会について調査し、支援するための方策について更なる具体策を提示しなければならないと考える。

参考文献

- 星山幸男, 「子ども会活動の現状と課題—仙台市における子ども会調査を事例として—」, 東北福祉大学研究紀要, 第21巻, 1996
- 野垣義行, 「子ども会活動の再生を求めて」, 青少年問題, 第44巻5号, 1997.5月号
- 宇田川光雄, 「子ども会活動の現状とこれから」, 教育と情報, No502 平成12年1月号
- 谷田貝公昭, 「子ども会活動における子どもの成長」, 教育と情報, No457, 平成8年4月号
- 白井眞・小木美代子・姥貝莊一, 「子どもの地域生活と社会教育21世紀への展望」, 初版, 株式会社学文社, 1996,
- 福岡県子ども会活動研究会「現代っ子がよみがえる子ども会活動入門」, 初版, 1992年
- *執筆分担は, I・III・IVが大野, IIが山本である。